

大学の障害学生についての文献 テキストマイニングによる分析

森澤裕佳（和光大学大学院）

2016年10月28日

キーワード

テキストマイニング 障害学生 時代変遷 タイトル 文献

Text mining, handicapped students, chronological change, title, bibliography

I. 問題

(1) 障害者の大学教育へのアクセス

すべての人が教育を受ける権利がある。高等教育においても同様である。大学を始めとする高等教育に障害を持つ人が参加していくことは障害者本人にとっても当事者とともに学ぶ学生にとっても共にお互いに意義のあることである。しかしながら障害を持つ人にとって大学への教育参加は閉ざされてきたという歴史があった。日本における、このテーマでの過去の実状がどのようなであったのか、また、現在どのように変化しているかに強い関心を持たざるをえない。

(2) 具体的な資料を明らかにし分析することが重要である

障害学生の大学生活支援をこれまでどのように行なわれてきたかという客観的な資料を探し出し分析することが必要である。そのためには様々な方法が考えられる。本研究では文献研究を行う。障害学生の日本における処遇についての研究史へとアプローチしたい。その1つの方法として日本における文献のレビュー（展望）を行いたい。本研究ではその第一歩として、文献データベースのキーワード検索を手がかりにして、障害学生についての文献がこれまでにどのようなものが公表されてきたかということ明らかにしたい。

II. 目的

本研究の目的は、大学の障害学生に関する文献を調べることである。時代の変遷により、研究の質(内容)と量に違いがあるか、5年ごとに障害学生の支援の文献の特徴をタイトルの用語の傾向を手がかりに明らかにすることである。

III. 方法

1. 分析対象と範囲

データベース CiNii で、論文検索のキーワードは「障害学生」「障がい学生」とした。初出の 1967 年から 2015 年までを対象とした。検索の結果、重複と英文タイトルを除いた 1139 件の文献を分析対象とした。

2. 分析の方法と手順

上記の方式で収集したデータをテキストマイニングにより分析した。数理システムの Text Mining Studio 5.1 を使用した。

IV. 結果

1. 基本情報

CiNii において検索した「障害学生」の 1139 件の論文のタイトルをテキストマイニングした。タイトルの平均文字数は 31.4 文字であった。延べ単語数は 8857 個で、単語種別数は 2762 単語であった。

2. 全体の推移

図 1 は各年の論文数である。1990 年代の後半から本格的に論文が出るようになった。それ以降、論文数は増加した。しかし、単純増加ではない。増加後に減少することの繰り返しが見られた。

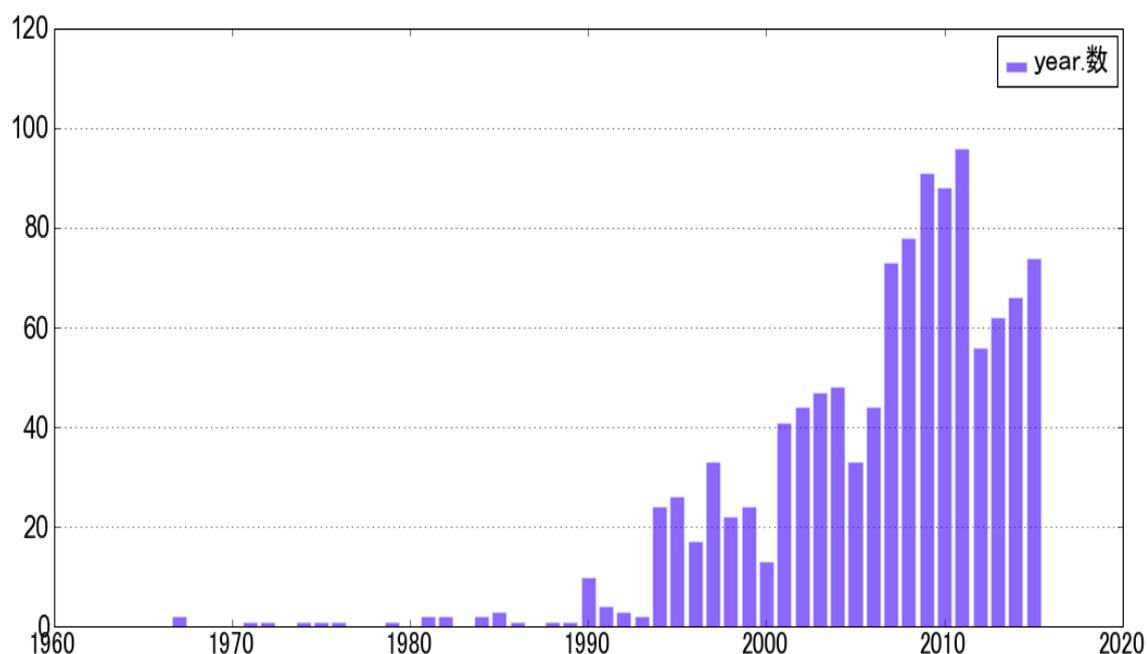


図 1 各年の論文数の推移

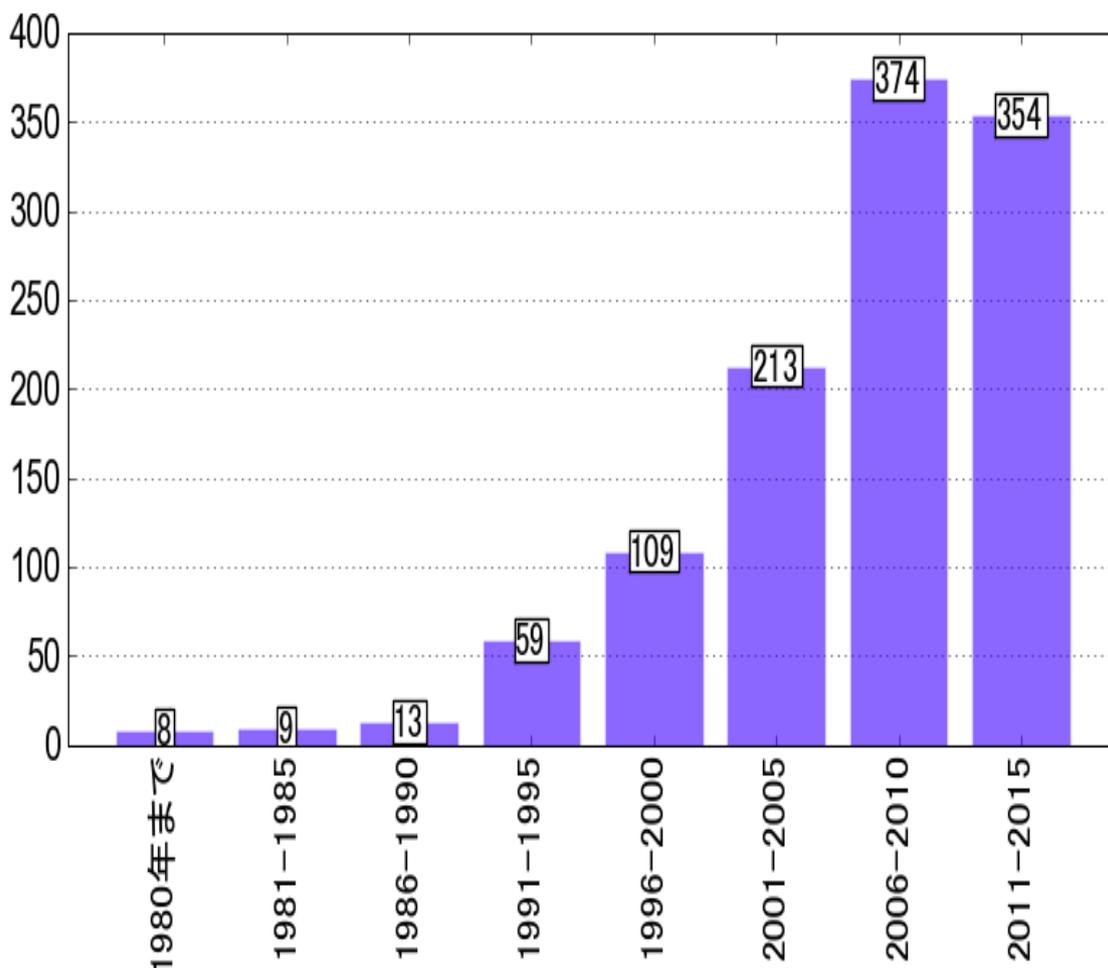


図2 5年毎の論文数の推移

図2は障害学生支援の頻出語を5年ごとに分析したものである。1990年までは文献数は少なかった。1991年から2000年まで大きく増加した。2001年から2010年までに急増した。2011年より減少傾向が見られたものの、近年は研究が盛んであると言える。

3. 単語頻度分析

図3のような結果が出た。障害の種別ごとの順位を見ると最も多いのは「聴覚障害」であり、その次に多いのは「視覚障害」であり、次に「発達障害」であった。上位30位には他の障害は入らなかった。タイトル分析のみでは具体的な障害が明らかにならないという限界がある。聴覚障害と視覚障害については日本の大学の対応の研究が蓄積していることが伺われた。身体障害者への対応は各大学で様々に対応していると思われる。しかし、論文タイトルとしては出現してこなかった。このことを解明することが課題として残った。

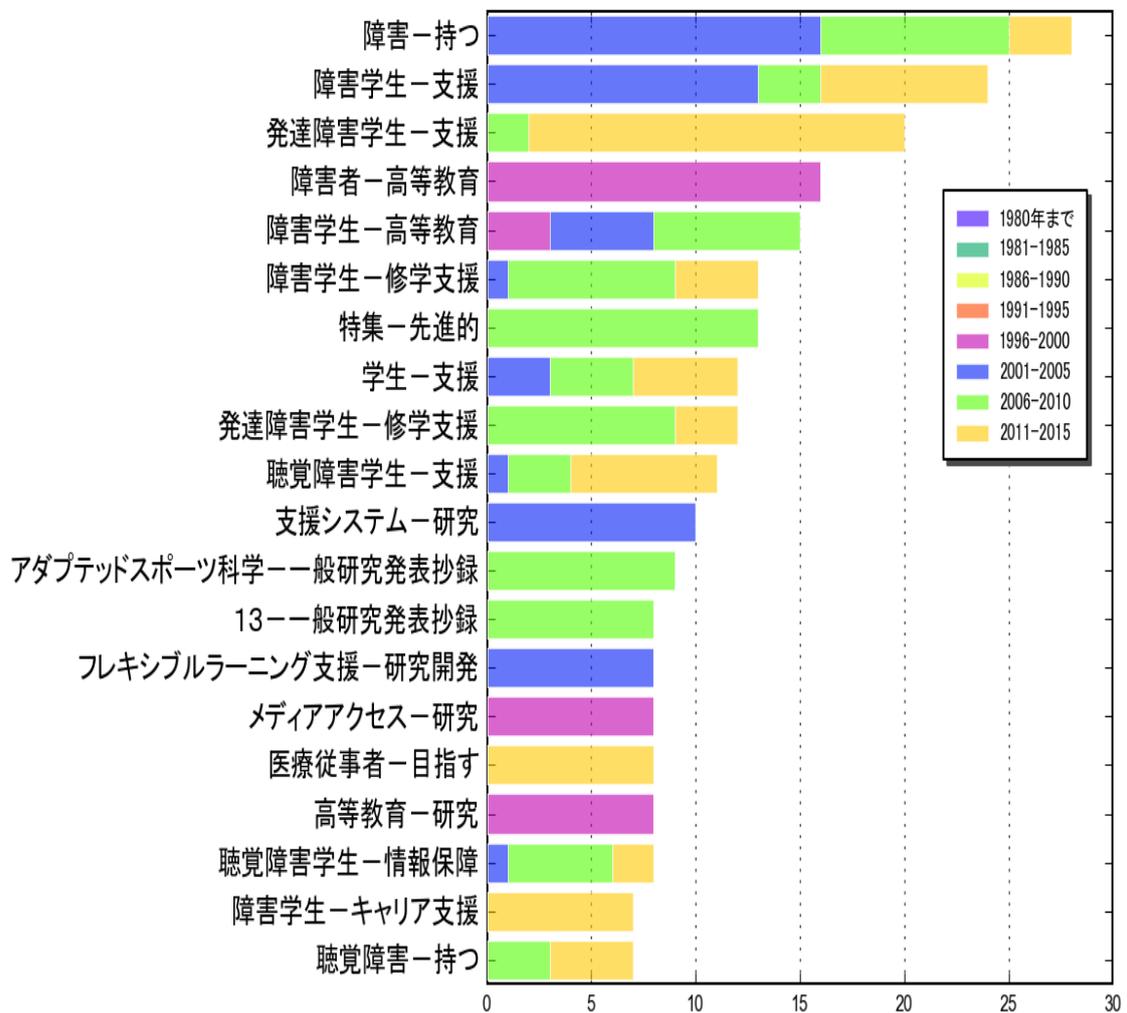


図4 係り受け分析上位20語

5.5 年ごとの特徴的な単語の分析

5年ごとの特徴語分析の結果、1980年までの特徴語「身体障害学生」は4/12回である。1981年から1985年までの特徴語「大学体育」は4/4回である。1986年から1990年までの特徴語「バリアフリー環境」は6/6回である。1991年から1995年までの特徴語「マルチメディア」は3/4回である。1996年から2000年までの特徴語「メディアアクセス」は10/11回であり、「メディア利用」は10/11回である。2001年から2005年ではまでの特徴語「支援システム」は13/14であり、「ハンディキャップグループ」は9/9回であり、「メディアFD」は9/9回である。2006年から2010年では、「取組」は26/30回であり、「障害学生支援ネットワーク」は13/13回である。2011年から2015年までの特徴語「発達障害学生」は71/91回であり、「発達障害学生支援」は14/15回である。

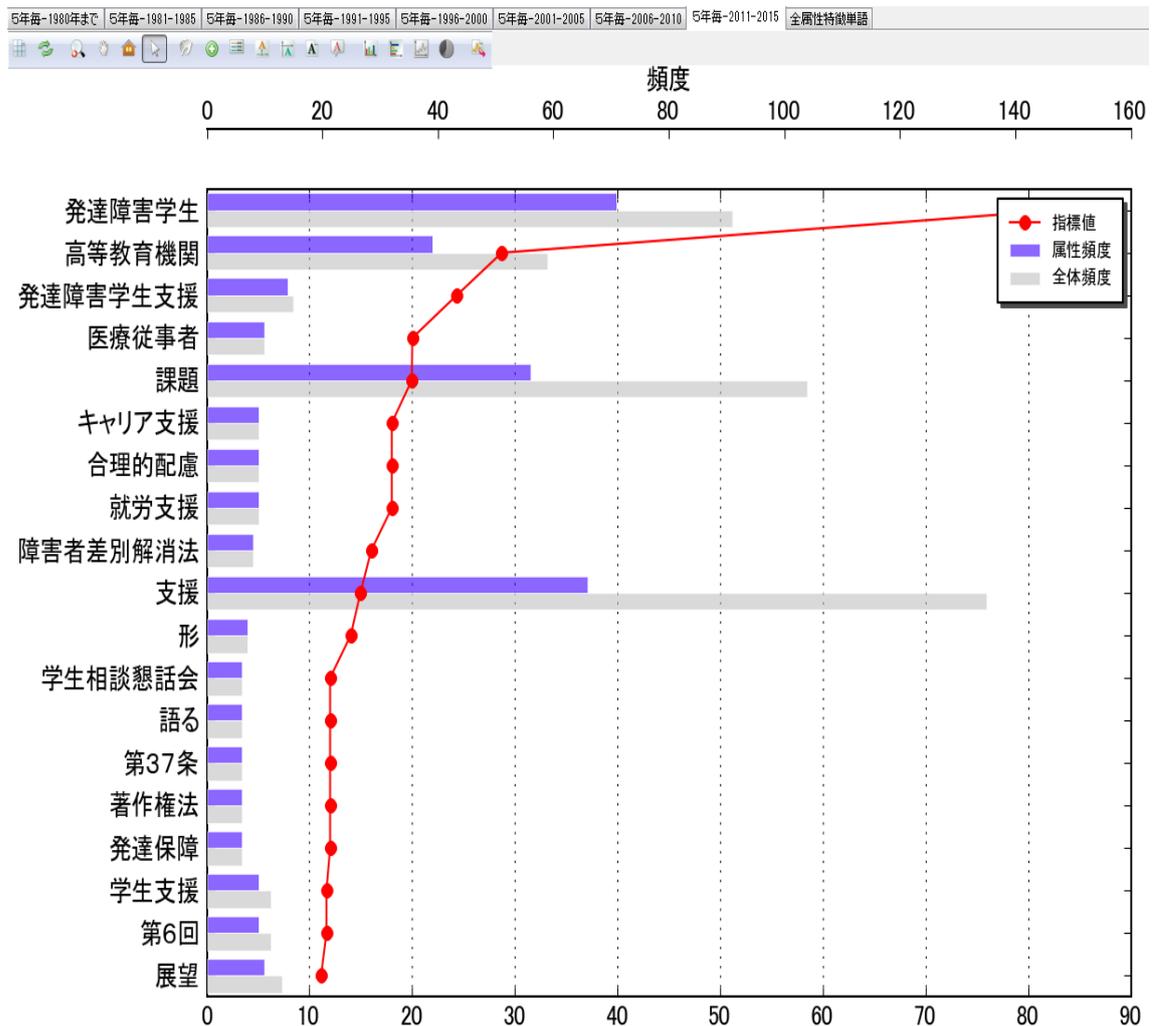


図5 2011年から2015年の特徴語分析

V. 考察

(1) 論文数の増加

①論文数は増加している

1967年から2015年まで論文数が増加している。西井(2003)によれば、「障害学生の大学入学受入れの歴史は古く、障害学生への支援のあり方は、時代の要請と共に変化、発展してきている」とはいえ図2にみられる文献が増加したのは1991年以降である。2001年以降になると更に増加している。この増加傾向は更に増加すると予想される。日本学生支援機構(2016)「障害学生数推移の調査」(図A)によれば2014年までに障害学生数がコンスタントに増加しているのみならず2015年度年には前年度のほぼ1.5倍に増加している。これに伴い、大学における障害学生の研究が増加することが確実であろうと思われる。



図 A 障害学生数と障害学生在籍率の推移(日本学生支援機構, 2016)

②2011年にピークの後その後増加

図 1 の各年の論文数の推移を見ると 2001 年から 2004 年に研究が増大した後、2005 年から 2006 年には減少し、2007 年から 2011 年までは急増した。にもかかわらず、2012 年にはかなりの論文数の減少が見られた。その後は、2015 年までに文献数が確実に増大している。しかし、その数字は 2011 年のピークには及んではない。このように障害学生の文献数は単純な増加ではない。ノコギリ型あるいはジグザグな変化を見せている。今回はこの現象については明確な説明はできない。けれどもこのような傾向が明らかになったのは大変興味深い。

(2) 今世紀に入ってから発達障害学生研究の文献の急増

図 3 にあるように、発達障害学生という論文タイトルは 2006 年以降に出現し、2011 年以降に急増している。このような背景には 2005 年に施行された「発達障害者支援法」の影響が推測される。日本学生支援機構(2016)から引用した図 B の「障害種別の障害学生数の推移」の調査によれば発達障害学生の障害種別統計は 2006 年(平成 18 年度)から始まっている。その後 2015 年(平成 27 年度)まで右肩上がりに人数が増加している。発達障害学生の研究文献の増加はこのような大学の状況の変化を反映しているのだろう。発達障害学生の援助の問題は引き続き今日的な重要課題であると言える。とはいえ肢体不自由、聴覚・言語障害、視覚障害を持つ学生たちもコンスタントに在籍しており、引き続きの研究課題であるのは言うまでもない。



図 B 障害種別の障害学生数の推移(日本学生支援機構, 2016)

(3) 先行研究との比較

柏倉(2016)は、視覚障害、聴覚障害、肢体障害の従来型に加え、「見えにくい」発達障害に対する支援を大学からの支援、キャリア支援、学生による支援からの3つの角度からの対応を論じている。今後の課題として障害者差別解消法の大学ぐるみの支援体制を提案している。本研究から、このような提案は納得できるものである。

(4) まとめと今後の課題

①2011年から2012年の論文数の減少の理由が不明であること

今回の研究では2011年から2012年から論文数が急減したことの理由が説明できなかった。偶然としてはあまりに大きな減少である。この理由を明らかにすることが今後の課題である。

②2015年から現在にかけてから受け入れの激動期であること

日本学生支援機構(2016)によれば図 A、図 B にあるように2015年以降大学の障害学生の受け入れ問題は、量的にも、質的にも大きく変化している。これは、ますます重要な課題として考えられる。本研究は2015年までの研究の調査であるので、このような大きな変化前までのデータしか扱っていないという限界がある。

③視覚・聴覚・発達以外の障害学生への対応が明らかにできなかったこと

時間的な制約のため明らかにできなかったこともあり、今後の課題としたい。例えば脳性麻痺の障害を持つ人は身体の不自由の問題と発話・書字を中心とするコミュニケーションに問題があるという人もいて複合的な問題については論文のタイトル分析では解明されないという問題点がある。

④本研究の成果

以上の限界を踏まえつつ、本研究では日本の大学において、障害学生の支援にかかわる研究と実践が、波がありながらも近年着実に増加していることが確認できた。また当面の重点である発達障害学生のための取組を重点として、更なる研究の発展が期待できる。今後の障害学生がますます増加していく中で、各大学において障害学生がどのようにサポートを行なっていくのかという課題が、量的にも、質的にも発展することが期待される。

謝辞

本原稿を作成するに当たり、和光大学の伊藤武彦教授の丁寧で熱心なご指導をいただき、また、早川尚貴さんに研究の支援をいただきましたことに感謝申し上げます。

【引用文献】

柏倉秀克 (2016) 障害者差別解消法の施行と大学における体制整備 大学時報. 第307号 36-43

日本学生支援機構 2016 障害のある学生の修学支援に関する実態調査 http://www.jasso.go.jp/gakusei/tokubetsu_shien/chosa_kenkyu/chosa/index.html

西井克泰 (2013) 高等教育における障害学生支援の現状と展望ー学びのユニバーサルデザインを目指して 武庫川女子大学教育研究所 研究レポート 第43号 89-99